**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第６０回　（２０２０年２月１１日）**

**・第６０回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」３５、３６頁**

（１月の復習）

マハーラージ：前回何を学びましたか？

参加者：私意識について。悟る前と悟った後の私意識は全く違う、というお話がありました。

マハーラージ：ギャーニはサマーディから戻っても、私意識だけです。もちろんブラフマンを知っていますが、この宇宙はブラフマンである、という考えはすぐには出ません。

例えばトーター・プリーは悟ったギャーニでした。彼はいつもポットの中に火を灯していました。それはとても神聖なものだったのですが、ある人がその火でタバコに火をつけたので、トーター・プリーは大変怒りました。それを見たシュリー・ラーマクリシュナは「あなたは、すべてはブラフマンだと言っているのにどうして怒ったのですか？　あの人もブラフマンでしょ」と言って笑いました。それを聞いたトーター・プリーは、自分の間違いに気づきました。ヴィッギャーニは、シュリー・ラーマクリシュナのように考えます。「この宇宙はブラフマンである」と本当に理解すると、宇宙と自分を同一するのです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　👉：『ラーマクリシュナの生涯』上巻p594（34）

シュリー・ラーマクリシュナはすべての中にブラフマンを見たので、例えばドッキネッショルで草の上を歩いた時には胸が痛くなりました。なぜなら草も自分もブラフマンなので、自分と草とを同一し、その影響で草を踏むと自分の胸も痛くなったのです。それがヴィッギャーニの状態です。

ギャーニは、サマーディから戻った後も、「これは幻」、「すべては幻」という感じがちょっと続きます。しかし、ヴィッギャーニは「すべてはブラフマン」と見ます。

参加者：そして、バクタがバクティの実践をして悟ってヴィッギャーニとして戻ってきたときには、すべてが神であることを見る、との話しでした。

マハーラージ：タクールもすべてがマザー・カーリーだと見ました。例えば、よい女性の中にもマザー・カーリーを見ましたが、売春婦を見てもマザー・カーリーのことを思い出しました。バクタがヴィッギャーニになることと、ギャーニがヴィッギャーニになることは、最終的には同じことです。すべてはマザー・カーリーです。

参加者：その後、バクタ・ヴィッギャーニは性質がないニルグナの神（ブラフマン）も認めるし、性質があるサグナの神（バガヴァーン）も認めるという話がありました。バガヴァーンとは、富、力、名声、美、知識、放棄、という6つの偉大なものを持っている存在です。

マハーラージ：バガの意味は「富」で、ヴァーンは「持っている」という意味で、6つの富を持っていることがバガヴァーンの基準です。もしあなたがそれを持っているとあなたもバガヴァーンになります（笑い）。

参加者：そして、ヴィッディヤ・シャーゴルが「神はある者たちにはより多くの、またある者たちにはより少なく力をお授けになったのですか？」という質問をちょっと反論するように言いました。それに関するマハーラージの説明で、当時のフランス革命の後の平等主義をヴィッディヤ・シャーゴルが勉強したことが背景にある、という点が面白かったです。

マハーラージ：西洋の平等に関する考えを言いました。アメリカの独立宣言にも、すべてのものは等しく創られている、と書かれています。

しかし、インドの哲学の考えでそれは正しくありません。なぜならみなさん絶対に違いをもって生まれてきていますから。双子でも同じではありません。見た目だけでなく性格もみんな違います。

例えばバラのつぼみは同じように見えるが、成長するにつれ、匂い、形、色、など違いがはっきりしてきます。人間も生まれた直後はつぼみのようですが、だんだん大きくなると、違いがはっきりします。形だけではなく、性質、性格も違います。力も能力も仕事も違います。

同じ国、同じ町、同じ家族、同じ宗教で条件は同じでも、性格は違います、そのことは人間だけではなく、動物もそうです。よく観察すると分かります。

西洋にはもう一つ、タブラ・ラサ（ラテン語: tabula rasa）という考えがあります。タブラ・ラサとは、何も書かれていないボードのことですが、みんなそのように心に何も書かれていない状態で生まれてくる、という考えです。しかしヒンドゥ教ではそれにも反対しています。なぜならサムスカーラが違うからです。輪廻転生のことを考えると、我々は前世から持っているものがいっぱいあります。それは小さいうちには分からないが、だんだんとあらわれてきます。我々にはカルマもあるので、タブラ・ラサ、つまり何も書かれていない状態ではなく、いっぱい書いてあります。ただ見えないだけです。　バニシングカラー、書いてあっても見えないが後で出る。

参加者：ヴィッディヤ・シャーゴルの質問に対してタクールは、それぞれに神のあらわれが違う、と答えました。

マハーラージ：ヒューマニズム（人道主義）の観点からみると、すべての人は平等で平等の権利を持っています。例えば平等に教育を受ける権利や健康を維持する権利を持っています。法律の観点で平等です。

しかし、以前はそうではなかった。例えばインドではカーストによって受ける罰が違いました。また、イギリス統治下のときには、イギリス人に対する罰はとても軽いものでした。アメリカでも白人と黒人の差別がありました。

ヴィッディヤ・シャーゴルはとても有名な学者でした。片やシュリー・ラーマクリシュナは無学でしたが、偉大な学者ヴィッディヤ・シャーゴルの言葉に反論しました。そしてヴィッディヤ・シャーゴルはシュリー・ラーマクリシュナに言い返すことができなかった。

なぜなら、シュリー・ラーマクリシュナは、本当は真理を悟っていたので、言葉に矛盾が出ない。間違えたことを言いません。

それに対してヴィッディヤ・シャーゴルは大きな慈悲を持ち、皆さんのためにたくさんお世話をしたし、勉強もたくさんしましたが、悟っていなかった。そして悟らないと言葉の中に間違いや矛盾がでます。

だからシュリー・ラーマクリシュナは遠慮せず偉大なヴィッディヤ・シャーゴルに直接「あなたには角が生えているわけではないでしょ」と言った。その言葉の意味は、「みんながあなたを尊敬しているのは、あなたに特別な体の特徴があるからではなく、その大きな慈悲と学識を尊敬している」ということです。

参加者：それに対するタクールの答えは「一人一人の中の神もあらわれの程度が違う」でしたが、さらにもう一つ、マハーラージの答え「神が創ったものに無駄なことはない」というお話で前回は終わりました。

（２月の勉強）

**📖読み**

**『福音』３５頁下段Ｌ１３～３６頁上段Ｌ１０**

*師はつづけられた。たんなる学識の中には何もない。学問の目的は、神を知る方法を見いだして彼を悟ることです。ある修行者が一冊の本を持っていた。何が書いてあるのかと尋ねられると彼はそれを開いて見せたが、そこには、すべてのページに『オーム・ラーマ』という言葉しか書いてありませんでした。*

*ギーターの意味は何であるか、この言葉を一〇回繰り返すと分かります。それは逆になって、ターギー、神のために一切を放棄した人、という言葉になるでしょう、そしてギーターの教えるところは、『おお人よ、いっさいを放棄して神のみを求めよ』なのです。人は僧であろうが在家の人であろうが、すべての執着を心からふるい落とさなければなりません。*

*チャイタンニャデーヴァが南インドに巡礼に出かけました。ある日、彼は一人の男がギーターを朗読しているのを見ました。もう一人の男が離れたところにすわり、それをききながら泣いていました。滝のように涙を流していました。チャイタンニャデーヴァが、『あなたにこの意味が全部わかるのか』とたずねると、男は『いいえ、お坊さま、私には聖典の言葉は一つも分かりません』と言いました。『ではなぜ泣いているのか』とチャイタンニャがたずねると、その信者は言いました、『私の目の前にアルジュナの馬車を見ます。主クリシュナとアルジュナとがそれの前のほうにすわって話していらっしゃるのを見ます。私はこれを見て泣くのです』と。*

（解説）

**学問の目的**

本文中の「学問の目的は神を知る方法を見いだして、彼を悟ることです」が一番大事なエッセンスです。『福音』の中でそのポイントは何度も出てきます。

なぜなら、

〇いっぱい聖典の勉強をしても実践してない人がたくさんいる。そうするとエゴを取り除くことができない。

〇聖典の勉強の本当の目的が何か知らない人がいるが、本当の目的を知ることは大事。

例えば有名な学者になりたいという名声欲で勉強をする人もいれば、聖典の知識でお金を稼ぐために勉強する人もいる。試験に合格するために勉強する人もいる。そして、本当の目的が何か間違って理解している人もいる。

〇たくさん聖典の勉強することと霊的な実践は同じだと考えて、霊的な実践の代わりとして多くの聖典の勉強をすればいいと、誤解している人がいる。

などの理由で、聖典を学ぶ目的をはっきりさせておく必要があるからです。

だからシュリー・ラーマクリシュナは、学問の目的は神を知る方法を見いだして、彼を悟ることだと言ったのです。ドッキネッショルにもこの類の人たちがよく来ていました。

シュリー・ラーマクリシュナは勉強している人より勉強していない人を好みました。なぜでしょうか？

参加者：謙虚だから。何もない方が受け入れられるから。

参加者：まっさらな人に教えるほうが簡単だから？

ある楽器の先生のもとに、楽器を習いたいという人が来ました。先生は「楽器をひいたことがありますか？」とたずねました。「あります」「ではひいてみてください」「…（ひくのを聴いてから）OK、授業料は一万円です」と言いました。別の人がやって来たときにも同じようにたずねて、楽器をひいたことがないと聞くと、「授業料は５千円です」と言いました。少し勉強していても間違って学んでいたとしたら、先生は、間違いを正してから新たに教え始めなければなりません。教えるのが大変です。だからこの先生は、経験者の授業料の方を高くしたのです。

今はインターネットで情報を得てから医者に診てもらう人も多いですが、自分で調べたものと医者の処方が異なると、お医者さんが言うことに反論する患者もいます。そうするとお医者さんは治療するのが難しい。

そこで、ある病院の待合室には「もしあなたがドクター・グーグルに相談してきたのなら、次はどうぞドクター・ヤフーに相談してください。そして最後にこちらに来てください」と書いてあるかもしれません（笑い）が、これは予め勉強しているよりも、何も勉強してないほうがもっと信仰が深くなるという例です。

ラトゥ・マハーラージとスワーミージーを比較してみてください。ラトゥ・マハーラージはシュリー・ラーマクリシュナが言ったことは何でも信じました。

（編者注：ラトゥ・マハーラージは教育を受けていなかったので真っ白な状態だった）

それに比べてスワーミージーはいつもタクールの言うことに反対した。スワーミージーは「私はいっぱい勉強してきましたが、薬を飲んで学んだことを全部忘れたいです」と言ったくらいです。

たくさん勉強をすると、混乱が出るだけでなく、「私はこれだけたくさんのことを勉強して知っている」というエゴが出る可能性もあります。

**真理の知識（タットワ・ギャーナ）を得ることが聖典を学ぶ目的**

聖典の勉強をサンスクリット語でシャーストラshastraと言います。

シャーストラはシャストから来ていて、シャストの意味は「武器」です。武器で無知を切る。それがシャーストラです。

この場合の武器は聖典です。聖典という武器で無知を消します。それがシャーストラです。

シャーストラ・ギャーナとは言葉だけの知識を指します。覚える、引用する、書く、話す、などすべて言葉だけです。本（聖典）を読んだだけで得た知識は、シャーストラ・ギャーナです。

しかし聖典を勉強する本当の目的は、タットワ・ギャーナ（真理の知識）を得ることです。

タットワ（tattwa）とは「真理」という意味で、

ブラフマ・タットワ＝ブラフマンの本当の知識＝真理

イーシュワラ・タットワ＝イーシュワラの本当の知識＝真理

です。

真理の知識（タットワ・ギャーナ）と言葉の知識（シャーストラ・ギャーナ）には大きな違いがあります。

例えばバガヴァッド・ギーターには、

・真理とは何か　・真理をどのように悟るか　・真理を悟るときの障害は何か　・実践とはどういうものか　・実践の結果はなにか　・なぜ真理の勉強をしなければならないか

が書かれており、旅行ガイドのように真理へと導いてくれますが、私たちはまず聖典に書かれていることを勉強し（＝シャーストラ・ギャーナ）、実践して絶対の真理の知識（＝タットワ・ギャーナ）を得ます。

**聖典を勉強したら実践する**

勉強して次の段階は、実践します。

勉強するだけで実践をしなければシャーストラの目的は満たされず、結果（＝タットワ・ギャーナ）は得られません。

もう一つはさっきも言いましたが、言葉だけをもし勉強すると、エゴや混乱が出ます。

例えば、私はバガヴァーンについて「六つの富を持っている」と一つだけ定義をしましたが、有名な学者はバガヴァーンの定義を聖典から10個くらい引用する可能性があります。

しかしその学者が他の人から「あなたの考えではどちらが正しいと思いますか？」と聞かれても答えられない。なぜならたくさん勉強しても、どちらが本当かが自分では分からないからです。

もう一つ問題があります。それはその学者が実践しない場合、実践しないことが聖典の教えと矛盾することです。例えば、聖典には「識別してください」と書いてあるのに識別の実践をしなければ矛盾です。

また聖典には「欲望を放棄してください」と書いてあるが、放棄できていなければ、名声欲や嫉妬が消えない。そうすると嫉妬から別の学者のことを全然好きではない、ということもあります。

そのように聖典から勉強したことを実践しない学者がいくら聖典の話をしても、聞き手によい影響を及ぼしません。だから、学者ほど勉強しておらず、言葉も流暢ではなくても、実践している出家僧のそばに行って話を聞きたいと思うのです。

シュリー・ラーマクリシュナは言いました。

「何も識別しない、何も放棄しない、欲望がいっぱい、そのような学者は草と同じです。（草と同じように無駄である、ということ）しかし実践している学者がいれば、その人のことは尊敬します」と。

（手紙の例）

親戚から結婚準備のために必要なものが書かれたはがきが届いたが、そのはがきをなくしてしまった。そこでみんなで探してそのはがきを見つけた。そのはがきに書いてある買い物リストを見て必要なものが分かると、そのはがきは棄てられた。

そして次の段階は、実際に買い物をすることですね。

聖典は買い物リストのようなものです。何が大事か書いてあります。しかし買い物をしなければ、どれだけ買い物リストを読んでも意味がないように、聖典を読んで必要なことを理解し、それを実践することが一番大事なことです。

この例は『福音』の中に何回も出てきます。

『福音』は毎日読んでください。シュリー・ラーマクリシュナの信者のために、とても大事なことです。毎日少しの時間でも大丈夫、１０分、１５分でもオーケーです。読んでいないなら、それは時間がないという理由ではありません。私はこれまでに何回も何回も同じことを言ってます。もし私の言うことを聞かないと、しようがないです。「たまに」「ときどき」では結果は出ないです。

さて、勉強したら実践が大事だというポイントは、トゥリヤーナンダジの生涯の中にもあります。

ハリ（のちのトゥリヤーナンダジ）のブラフマンへの興味はときどき非常に強くなり、かれは何日間もシュリー・ラーマクリシュナを訪れることができなかった。そのような無沙汰が気づかれずにすむはずはなかった。ハリの友人たちがドッキネッショルに行ったとき、師が彼らにたずねた、「ハリはどうしたのかね、近頃ここにやって来ないが」と。彼らは、かれはヴェーダーンタの勉強に没頭している、と答えた。後にかれが再びやってきたとき、シュリー・ラーマクリシュナは言った、「お前はヴェーダーンタを勉強し、それの理想を瞑想しているときく。もちろんそれはよい。だが、ヴェーダーンタの教えは何であるか、言ってごらん。ブラフマンだけが実在、この世界は非実在である、ということではないのかね。それが要旨ではないか。他に何があるのかね。それではなぜ、お前は実在しないものを捨てて本ものにしがみつかないのか」

　これは真理であるから、ハリも認めないわけには行かなかった。ヴェーダーンタの文書全般がこの言明に基づいているのだ。人がどんなに沢山読んでも、それで真理を理解することはできないであろう。…　確信させるのは経験だけである。…　実在は書物の中にはないのである。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　👉（『神を求めて』p15，16）

**聖典のエッセンスは「アスティ　バーティ　プリヤ」**

ブラフマンの特徴は、アスティ　バーティ　プリヤ　asti bhati priya　です。

アスティ バーティ プリヤとサッチダーナンダは同じです。

・アスティ：「どこでも、いつでも、すべてのものの中に存在している」。

サット（絶対の存在）と同じ。

・バーティ：「あらわれている」。チット（絶対の意識、絶対の知識）と同じ。

意識が知識となってあらわれてます。

・プリヤ：「もっとも愛しているもの」。アーナンダ（至福）と同じです。

我々が一番愛しているのは何ですか？　「私」です。

「私」とは何ですか？　アイデアがわきにくいかもしれませんが、「アートマン」です。なぜなら「アートマン」が我々の基礎だからです。

我々は、私の友達、私の息子、私の娘、私の旦那、私の奥さん、私の家、私の体など、「私」に関したものを愛しています。「私」に関係しないと興味がなくなります。そう感じているときの「私」とは、体、心と同一視している「私」です。しかし、先ほども言ったように、「私」の基礎は、体、心ではなくアートマンでしょ。ブラフマンがアートマンの形で我々の中にいます。それがプリヤです。そして最も愛するものがアートマンであり、プリヤ、至福そのもの、喜びそのものであるなら、「私」は至福であるはずです。

しかし我々が、褒められるととても喜び、批判されるととても悲しむのは、「自分」「自分」というエゴをもっとも愛していると思い込んでいるからです。本当の自分ではなく、エゴの自分、つまり非実在にフォーカスしているのです。そうではなく、実在（アートマン/ブラフマン/サッチダーナンダ/アスティ　バーティ　プリヤ）だけにフォーカスしてください。非実在は放棄してください。

シュリー・ラーマクリシュナは「アスティ　バーティ　プリヤ」と言いました。「ブラフマンはすべてのヴェーダーンタのエッセンスです。どれだけ多く勉強したかが大事なのではない。本当に大事なことは、ブラフマンだけが実在、すべては非実在、ということです」と。

シュリー・ラーマクリシュナの特徴はパラマハンサという言葉に集約されます。

ハンサとは白鳥です。白鳥は、水と牛乳が混ざっている液体から牛乳というエッセンスだけを飲むと信じられていますが、シュリー・ラーマクリシュナもエッセンスだけを理解し、エッセンスだけを皆さんに教えました。

そのエッセンスとはヴェーダーンタです。

バガヴァッド・ギーターの内容もヴェーダーンタです。

**実践しないと勉強をしても結果が出ない例**

たくさん勉強するよりも、実践するほうがもっともっと大事です。

まるで人生のようですね。

実践していない学者が内省すると、「私はいっぱい聖典を勉強して、いっぱい知っているのになぜまだ恐れ、無知、執着、心配がいっぱいあるのだろうか。どうしてそれがなくならないのだろうか？」と考えるでしょう。

有名なベンガルのある作家は、タクールについて素晴らしい本を書きました。その本のスタイルはとても素晴らしい。そして作家の話もとても素晴らしかった。私は一度聞いたことがあります。その方は、講演のためにさまざまな場所へ赴き、そのどこでも聴衆はとても喜びました。

その方とブーテーシャーナンダジが同じ会合に参加した際に、二人は同じ人力車で帰りました。その時その方は「マハーラージ、私の話をみんなはたいそう褒めますが、私の中にまだ幸せはできていません」と言いました。みんなが称賛し名声もあるのに、自分の中に幸せは出てない。なぜなら実践していないからです。

『福音』に小舟に乗った学者の話がありますね。

小舟にのったある学者と相客との会話。

学者「あなたはヴェーダーンタを勉強しましたか？」　相客「いいえ」

学者「サーンキャとパータンジャラは勉強しましたか？」　相客「いいえ」

学者「では哲学は全く知らないのですか？」　相客「はい、知りません」

そのとき暴風が吹いて、相客は学者に「あなたは泳げますか？」と尋ねると、学者は「いいえ」と答えた。相客は「私は、哲学のことは何も知りませんが、泳げます」と言った。

この話の意味は、どんなに哲学をたくさん学んでも、泳ぎ方を知らないと世俗の海を渡ることはできない、という意味です。泳げなければ死んでしまう、つまり勉強するだけで実践をしないのなら人生は無駄になる、ということです。

同じような内容のとても面白い小さい詩もあります。

私たちの問題はこれです。どれだけ聖典の勉強をしても、実践をしないと結果は出ません。何も勉強しないのもよくありませんが、大事なことは実践、実践、実践です。バガヴァッド・ギーターのエッセンスも「実践」です。

**「放棄」のエッセンスは「神のみを求めよ」**

そしてシュリー・ラーマクリシュナは、ギーターが説く最終的な実践とは「一切を放棄して神のみを求めよ」であると言っています。

バガヴァッド・ギーター第１８章６６節を読んでください。

「あらゆる宗教の形式をけ、ただひたすら私（シュリー・クリシュナ）に頼り服従しなさい。そうすれば私が全ての悪業報から君を救ってあげよう。だから何ら心配することはない」

（編者注：協会発行の翻訳本では、18-66節の「ダルマ」を「宗教」と訳し、「あらゆる宗教の形式を斥け」としているが、マハーラージはこの節におけるダルマとは「霊的実践」や「義務」だとしてこのあと話を進められている）

この節はギーターのエッセンスです。実践が重要だと教えてきたシュリー・クリシュナは、最後の最後に、「霊的実践をもしりぞけて、ただ私を避難所としなさい」と言っています。「一切を放棄して神（シュリー・クリシュナ）のみを求めよ」、つまり霊的実践を含めたすべてを放棄し（非道徳も放棄、道徳も放棄、執着も放棄し）、神だけを求めよ、と言っているのです。

シュリー・ラーマクリシュナは、「ギーターを１０回繰り返すと逆になってターギー、神のために一切を放棄した人、という言葉になる」と言いましたね。皆さんも１０回ギーターと言ってみてください。

参加者みんなで：ギーター、ギーター、ギーター・・・（10回繰り返す）

ターギーになりましたね（笑い）、正確にはティヤーガが放棄で、放棄を実践する人がティヤーギーです。出家と同じことです。

この話はとても分かりやすくて印象的ですね。シュリー・ラーマクリシュナが考え出した例え話です。

そしてこのように放棄を強調したあと、シュリー・ラーマクリシュナは「人は僧であろうが在家の人であろうが、すべての執着を心からふるい落とさなければなりません」と付け加えました。なぜでしょうか？

「放棄」という言葉に対して学者は、「家住者には放棄の実践は難しい。家住者に、家族や仕事・義務などの放棄を実践することは難しい」と反論しがちであることをシュリー・ラーマクリシュナは知っていたからです。ですがそうした外の放棄はできなくても、内なる放棄、つまり執着の放棄は可能です。そこですかさず「僧であろうが在家の人であろうが、すべての執着を心からふるい落とさなければならない」と言ったのです。もちろん放棄の大事なポイントは執着の放棄であることも教えたいことでしたが。

執着の放棄は家住者であっても実践できませんか？

参加者：できます！

心にある執着を放棄することは、みんなにできることです。みんなにとって大事なことです。そして執着を放棄しないと、あまり意味がでない。

**実践、実践、実践**

シュリー・ラーマクリシュナが「単なる学問の中には何もない」という話をしたのは、それがヴィッディヤ・シャーゴルにとって大事な話だったからです。

ヴィッディヤ・シャーゴルはとても有名な学者で、神様にさほど興味がなかったがヒンドゥ教の聖典もいっぱい勉強しました。それに対するヴィッディヤ・シャーゴルの結論は、「神様はありますけれども、神様のことを悟ることはできない。だからできるだけ皆さんのお世話をしたほうがいい」でした。もちろん間違った結論です。ヴィッディヤ・シャーゴルほど多く勉強してもその結論でした。しかし、ヴィッディヤ・シャーゴルはふつうの学者とは違い、性欲など何もなく、慈悲がいっぱいありました。だからシュリー・ラーマクリシュナはヴィッディヤ・シャーゴルに興味を持ち、彼のもとを訪ねました。

もう一つ学者の物語があります。

昔、学者たちは、他の学者を議論で負かすと相手よりも良い学者だと見なされました。ある一番の学者になることが目的で聖典を勉強しているが実践をあまりしていない学者がいました。その学者が実践をしている学者と議論をすることになりました。実践をしている方の学者が他方に「議論をするのは承知しましたが、一つ条件があります。その条件とは、七日間ずっと私が話すので、その話の間は何も反論しないでください。それが条件です」と言いました。他方の学者は承諾しましたが、最初は思わず反論したり、心の中で反論を続けていました。しかしだんだんと聞いているうちに、識別が出てきました。なぜなら話し手の学者は実践していたので話に大きな力があったからです。そして七日間話し続けた後、聞き手の学者は「反論はありません」と言いました。なぜなら、実践していないほうの学者は、話を聞いているうちに内側から変化が起き、謙虚な心になったからです。

本当の知識が出ないと、謙虚にはなれません。

ときどき自分がどれくらい知っているかを見せたいために質問や反論をする人がいますね。

私の講座でも議論をしてくるお客様にあったことがあります。それで講座が中断されると他の人が面白くないので、私はそんなときは「オーケー、もしあなたが個人的に話をしたいのなら、あとで尋ねてください」と言います。そのような人の中にはエゴがいっぱいあります。自分の知識を見せびらかしたいので、答えを集中して聴く忍耐がない。だからバガヴァッド・ギーターでシュリー・クリシュナは、「本当に大事なことは実践することです」と言ったのです。

ラーマーナヤ叙事詩のエッセンスは何ですか？　ラーマです。

マハーバーラタとバーガヴァタムの一番のエッセンスは何ですか？　クリシュナです。

ウパニシャッドのエッセンスは何ですか？　ブラフマンです。

他の多くの登場人物はそんなに大事ではない。もちろん物語はいっぱいあっても、ラーマーヤナのエッセンスはラームです。

あるサドゥの本の中にはオーム・ラーマとだけ書かれていた。なぜなら、オーム・ラーマが一番大事ですから。

バガヴァッド・ギーターのエッセンスは、シュリー・クリシュナです（👉ギーター18-66）。本文中のチャイタンニャデーヴァの例、ギーターの朗読を聞いている離れたところから聞いている人が滝のような涙を流して泣いていたのは、彼がシュリー・クリシュナのヴィジョンを見ていたからです。

聖典の勉強はもちろんいいです。ですが、神様の信者になると、実践がとても大事です。そうしないと大事な機会を失ってしまいます。今朝のリーディングのときにその話がありましたね。どんな話でしたか？

参加者：時間がないから実践をしないというのは、それは時間を作ってないだけ。

そうです。みなさんは勉強や瞑想をしない理由を、時間がないだとか忙しいと言います。しかし、もし今、死神が来たらすぐに連れていかれるんですよ。時間がないから後にしてください、ということは死神には通用しません。

だから、「忙しい、忙しい」と言わず、時間を絶対に作ってください。

そうしないと恐れ、死ぬ恐怖、苦しみは続きます。

もちろん皆さんに仕事があることは知っています。仕事はあっても、寝る時間もあるし食事も一日に4～5回はしますね。お風呂の時間、おしゃべりの時間、携帯のチェックは60回くらいかもしれない。そうしているうちに時間が無くなって瞑想の時間が取れない。それではいけません。何度も言いますが、実践しないと勉強が無駄になるからです。

大事なことは実践です。『福音』の中に何度も同じことがあります。

シュリー・ラーマクリシュナののちの出家直弟子はみんなとても高いレベルでしたが、シュリー・ラーマクリシュナは瞑想などの実践をするために真夜中に彼らを何回も起こしました。あなたはここに寝るために来たのですか？と時々、叱られることもあった。そしてスワーミー・ヴィヴェーカーナンダなど、例外なくみんな実践しました。出家直弟子は高いレベルで生まれてきていましたが、それでも実践しました。

シュリー・ラーマクリシュナは自分も実践しました。

ホーリー・マザーもいっぱい実践しました。

本当は自分自身のためには実践は必要ではなかったにもかかわらず、皆さんを教えるために自分も実践しました。神の化身は何も実践する必要はないのに、お釈迦様もイエスも実践しました。

我々は結果だけが欲しい。悟りが欲しい。しかし、悟りのための実践はしたくない。それでは悟れません。それでシュリー・ラーマクリシュナは、実践してください、と言いました。

オーケー、今日はここまで。質問や感想ありませんか？

**講話の感想**

参加者A：一番の印象はボートの話です。実践しないと何も意味がない。やっぱり泳げなかったら人生を無駄にする、ということを学びました。

参加者B：最後の自分が一番偉いという名声を得たいだけの学者が実践を積んだ学者の話を七日間聞き続けていくうちに、内省して識別することで謙虚な気持ちになった、ということが勉強になりました。

マハーラージ：もう一つ『福音』の中に話があります。

ある王様がバーガヴァタムを学者から勉強することを望んだので、ある学者が教えに行きました。そして毎日教えた後に「王様、あなたは理解をしましたか？」と尋ねるのですが、王様は毎日「まずあなたが理解してください」と言いました。そこで学者はその言葉の意味を内省しました。そして最終的に家族を放棄して出家することにした。そして「王様にお知らせしてください、今、私はバーガヴァタムの教えが何か、分かりました」と言って家を出ました。とても深い例です。

参加者C：実践を生活の中にということですが、まだどうしても楽な方に行ってしまって瞑想をしない日もある。もし本当に自分の好きなものが世俗的なレベルではなかったら、そのようなことはないはず。だから本当に自分が好きなものをもっと自分が内省する必要がある、と思った。アートマンって言葉では簡単ですけれども。

マハーラージ：アートマンを考えなくても神様のことをイメージしてください。

もう一つ大事な話は、トゥリヤーナンダジの話です。たくさんヴェーダーンタを勉強するよりも、ヴェーダーンタのエッセンスが何かを理解することが大事です。

（第６０回『福音』勉強会）以上